

土佐藩「徳弘家資料」から見た幕末期の日本

—軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大過程—

信州大学教授 坂本 保富

はじめに

(一) 筆者の問題意識と研究姿勢

思い返せば、筆者の長い学生時代に相当する一九六〇年代から一九七〇年代にかけての時期は、アメリカ人日本研究者による日本近代化研究の成果が、学問研究の領域や分野を超えて、広範囲の日本人研究者たちを震撼あるいは魅了し、あたかも「昭和戦後の黒船来航」かと錯覚させるような喧騒を惹起した。

すなわち、一九六〇年代には、アメリカ・アジア学会 (Association for Asian Studies) の特別プロジェクト「日本近代化研究会」(Conference on Modern Japan)、座長はイェール大学教授のJ・W・ホール) が結成され、その研究成果が、プリンストン大学教授のM・B・ジャンセン編『日本における近代化の問題』(岩波書店刊、一九六八年、*Changing Japanese Attitudes Toward Modernization, Princeton University Press, Princeton, 1965*) の出版を皮切りに、五冊もの日本研究書が矢継ぎ早に刊行されたのである。

彼らの研究成果は、前世代のE・H・ノーマン『日本における近代国家の成立』(*Japan's Emergence as a Modern State, New York 1940*) やルース・ベネディクト『菊と刀』(*The Chrysanthemum and the Sword, New York, 1946*) などにおける日本研究の視座を大きく転換し、新たな地平を拓くものであった。すなわち従来の日本研究においては、日本近代化の否定的要因とみ

られてきた日本の前近代社会—徳川社会の方向から、日本近代化過程を連続的に把握しようとするものであった。

そうしたアメリカ人研究者たちによって、外側から提示された日本近代化研究の成果は、日本の近代化研究者たちに対して、斬新な問題意識や研究視座、あるいは研究方法、等々を提供する、まさに知的好奇心を喚起する刺激的な「舶来品」であったに違いない。それ故に、外来珍品のもつ新奇性 (novelty) に魅了された、歴史学関係を含む日本の研究者たちは、その理解と応用に、否、その受容と模倣とに躍起となっていた。

かくして、日本の様々な研究分野で、日本近代化研究の事例研究が積極的に試みられた結果、その多くは、本家本元である欧米先進国の近代化現象との相違を発見したとき、依然として、それを日本近代化の後進性や特殊性として理解しようとするような研究活動が、堂々と活発に展開されていた。そこでは、欧米先進文化を受容しようとした幕末期以降の日本側の、あるいは、その前提的基盤である近世日本社会—徳川社会の、風土的・歴史的・文化的な諸条件は、捨象あるいは排除され、専ら近代化モデルの発信者であった欧米先進国側が提示したメルクマール (Merkmall) —「近代化の計測基準」に照らし合わ

せて、それに該当ないしは類似する思想や実態、条件や要因が、どの程度まで近世日本社会の展開過程に内在あるいは萌芽していたか、という視座や態度で探究されたのである。

確かに、アメリカを中心とする欧米諸国の研究者たちが提供する、欧米先進国型の近代化モデルという物差しで、日本近代化の展開過程を分析し計測しようとする外側からの研究視座や研究成果は、日本近代化研究それ自体の可能性を拡大深化し、豊にしてくれる貴重な恩物ではある。だが、その場合に注意すべきは、異文化受容の主体性 (subjecthood)、すなわち異文化世界における何をどのように理解し受容して、これを如何に消化し普及させるかという、受容する側の主体性が、看過ないしは捨象されてしまうという危険性についてである。それ故に、欧米追隨の近代化理論とそれに基づく従来の研究成果に対して、不可避的に異文化受容を推進しなければならなかった幕末期以降の日本側の歴史的現実と、そこにおける主体性の確保という基本的視座から逆照射し、批判的に吟味し再検討を加える必要性があるのではないか。即ち、あくまでも

(二) 筆者の研究領域と研究課題

筆者の日本近代化研究に関する具体的な研究課題はいくつかあるが、学生時代以来の研究課題は、幕末維新期日本における本格的な西洋文明との邂逅を契機に成立した「東洋道徳・西洋芸術」思想の成立展開に関する教育文化史的研究であり、これを換言すれば「幕末維新期洋学教育史研究」と表現してもよい。極東アジアの儒教文化圏にあって、伝統的な学問文化を形成してきた日本人が、隣国の清朝中国に勃発した驚天動地のアヘン戦争（一八四〇—一八四二）を契機とする日本の幕末維新期に、西洋近代科学を中心とする西洋文明を受容するに際して成立した儒学的洋学受容論、即ち「東洋道徳・西洋芸術」思想の成立展開過程に関する思想的考察と、その思想の下で私塾や幕府諸藩の学校を媒介として西洋諸科学（洋学）が普及拡大する教育的現象に関する実態

幕末期以降の日本が辿った近代化過程の歴史的実態に即して、従来の日本近代化研究に関する先行研究を検証すると同時に、肝心の理想型モデルとされた欧米型近代化の理論や指標それ自体をも、批判的に検討して相対化する必要性がある、ということである。そして、これまでの日本の学問的世界を席卷した、近代化＝欧米化という紋切型 (stereotype) の近代化に関する概念や理論を超越して、アジアであれアフリカであれ、近代化 (現代化、modernization) を推進しようとする側の主体性や現実的諸条件を踏まえた、新たな近代化の概念や理論の構築が求められており、それによって近代化現象の多義性や多様性を認知あるいは確認する作業が必要であるといわざるをえない。

筆者は、以上のような日本近代化研究に関する素朴な感慨を抱いて学生時代を過ごし、研究の世界に入った。この度、高知市民図書館から刊行された拙著『幕末洋学教育史研究』は、上述のような筆者自身の学生時代以来の問題意識に基づく、日本近代化研究に関する具体的な成果の一端である。

分析。これが、研究者としての筆者のライフワークである。

上記の研究課題は、これまでの筆者の具体的な研究活動の展開においては、次の五つに分類することができる。

- (1) 信州松代藩出身の佐久間象山を事例とした「東洋道徳・西洋芸術」思想の成立展開に関する研究—象山における「東洋道徳・西洋芸術」思想の形成過程と、その教育的な展開過程の分析。

- (2) 象山門人・吉田松陰（長州藩）を事例とした「東洋道徳・西洋芸術」思想の展開過程の研究—吉田松陰の象山塾入門を媒介とした思想と行動の変容に関する研究。

(3) 象山門人・小林虎三郎（長岡藩）を事例とした「東洋道徳・西洋芸術」

思想の展開過程の研究―「米百俵」の教育的思想世界の研究―日本近代化と小林虎三郎の思想と行動の軌跡の分析。

(4) 幕末期の「東洋道徳・西洋芸術」思想による軍事科学系洋学私塾を媒介とした洋学の普及拡大過程に関する実証的研究―高知市民図書館蔵「徳弘家資料」の解説分析による旗本・下曾根信敦、及び土佐藩・徳弘父子の西洋砲術教育の実態分析と門人析出。

(5) 明治前期文部官僚の「東洋道徳・西洋芸術」思想を基盤とした教育認識

(三) 筆者における歴史認識の精神と態度

(1) 歴史理解における視座の問題

―過去・現在・未来（歴史的な時間と空間の不可逆性）

我々が生きて存在する「現在」(now, the present time) という時間的・空間的な「今」は、歴史を測る絶対的な基準ではありえない。現在もまた過去となるからである。現在とは、時間と空間とが織りなす歴史の世界における一瞬の断面であり、その流れは瞬時も止まることはない。従って、現在は、刻一刻と未来に取って代わられ、未来を孕んだ過去の中に融合していく。現代人にとって、歴史的な過去の出来事や人物は、現在を基準として捉えた単なる批判や同情の対象では決してありえないのである。それ故に、歴史的な時間と空間の織りなす世界に生起する歴史的事象を理解する際には、現在を投影した過去（過去の現在化）や過去を投影した現在（現在の過去化）という、時間や空間を捨象した安易な歴史理解の態度は否定されなければならない。と同様に、「現在の未来化」や「未来の現在化」をも否定しうる禁欲的な精神と態度とが、歴史理解には求められると云ってよい。即ち、時間と空間とが連続的に織りなす歴史的世界の、どのようなビューポイント (viewpoint) から歴史的

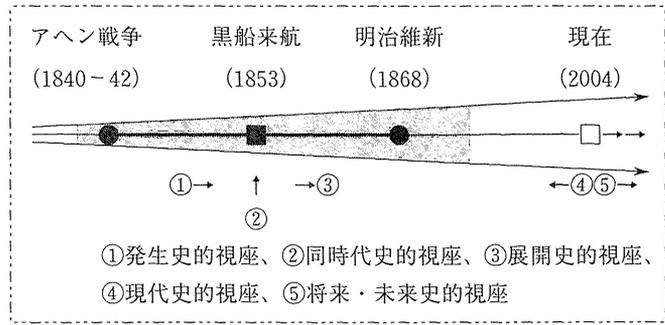
の形成と展開―信州飯田藩「中川家資料」の解説分析による文部官僚・中川元の研究。

以上のような五つの小さな山が連なって、一つの大きな山―幕末維新期洋学教育史研究、即ち「東洋道徳・西洋芸術」思想の教育文化史的研究が成立するのである。いわば、筆者の拙い研究は、「八ヶ岳」ならず「五ヶ岳」の研究といえるかも知れない。その中で、この度、高知市民図書館から公費刊行して頂いた拙著『幕末洋学教育史研究』は、(4)に該当する研究の成果である。

事象を捉えるか、という視座の設定の仕方が重要となるのである。

上述のような歴史理解の考え方を、幕末期の具体的な歴史的事例に即して、窮理図解して説明するとすれば、一体、どのようなことになるのか。例えば嘉永七（一八五三）年の黒船来航という出来事は、長く続いた徳川幕府の支配体制が決定的に崩壊へと向かう、まさに幕末期の幕開けとされる。この黒船来航という歴史的事象を、それが生起する前後の関連する出来事―隣国の清朝中国におけるアヘン戦争の勃発から明治維新による近代国家の成立に至る歴史の展開過程―との連関の中で、どのようなビューポイントから捉えることが、歴史展開に即した歴史理解の妥当な在り方なのか。筆者は、そのポイントとして、次の①から⑤までを設定することができると考える。①は、歴史が展開する時間的・空間的な展開の方向から黒船来航という出来事を発生史的にみる視座である。次の②は、黒船来航という出来事が起きた時空的位置からリアルタイムでみる同時代史的な視座である。さらに③は、黒船来航という出来事が、その後の歴史展開にどのような影響を与えていったのかという展開史的な視座であり、そして④は、現在を基準として黒船来航という歴史的な出来事を捉え、その出来事が現代社会にどのような影響や意味を有する出来事であったのかを問

洋学の普及拡大過程



う現代史的な視座である。最後の⑤は、黒船来航という過去の歴史的な事象が、今後の将来あるいは未来において、どのような意味を有するものであるかを問う将来展望的な視座である。

以上のように、黒船来航という歴史的事象を理解する場合、④や⑤、あるいは③や②の視座から捉えるのではなく、あくまでも①から⑤という歴史展開の順序に即して分析し理解することが、一つの歴史的事象を、歴史的潮流から切断された単なる断片としてではなく、歴史展開の連続性や相関性の因果律を踏まえて捉えることであり、そこにこそ歴史の研究や学習の意義があると考えられる。

(2) 外来文化の受容における主体性の問題

—「東洋道徳・西洋芸術」思想の理解の前提

幕末維新时期以降における後進国・日本の近代化過程は、西洋近代科学の諸成果を積極的に摂取し、それらを自らのものとして吸収消化し、取り込んでいく過程であった。換言すれば、それは、非西洋文化圏の極東アジア地域における後発型近代化の典型的事例としての西洋文明化現象であったとみることができ。従って、日本近代化の内容面での具体的な先駆けとなり中心となったものは、もちろん西洋近代の科学技術文明であった。だが、そこに西洋近代の科学技術文明の取り込みを内実とする西洋化現象とはいっても、それは移入や移植という、単なる模倣的営為として否定的あるいは消極的に理解されるべきものでは決してない。異質な外来文化を摂取する際に注目されるべきは、それを受

容して消化し、意味づけて普及させる側における国家的・民族的な主体性——いわゆる歴史的アイデンティティ (identity) の問題であり、その上で受容基盤としての学問文化的あるいは教育文化的な諸条件の成熟如何の問題が問われなければならない。このような異質な外来文化の受容に際しての基本的な問題認識に関して、かつて筆者は、次のように論述したことがある。

日本人の海外異文化の受容の在り方を、教育文化における模倣 (imitation) と創造 (creation) との相関性のメカニズムの観点から照射し検討した場合には、受容 (acceptance) という、一見すると模倣的な営みの構造が、はたしてどのようにみえてくることになるのか。実は、そこにおいて分析や理解の重要な着眼点の一つとなってくるのが、受容する側における主体性 (subjecthood) の問題であろう。ある一定の歴史的・文化的・風土的な諸条件の下に成立し発展した思想や文化が、それとは全く異なった条件をもつ地域の人々に受け入れられる場合には、それがそのまま受容され展開されるということは、極めて稀で困難なことである、といわなければならない。そこには、当然のことながら、一種の「変容 (modification)」という現象が認められてしかるべきである。それは、送り出す側の意図や内容そのものとは別に、何をどう受け入れ、いかに消化し展開するかという点において、受容する側の選択や理解、消化や展開の仕方を巡っての自由意志、すなわち異文化受容への主体性が機能することによって、必然的にもたらされる質的あるいは性格的な変化である、とみることができ。従って、異文化受容の問題を理解する場合には、受容する側の主体性の存在とその働き方にこそ注目しなければならない。このような基本的な観点や視座が、従来の欧米型近代化を理想型 (基準) として日本近代化を論ずる立場には欠落していたとみてもよいであろう。

(四) 幕末洋学史研究の現状と問題点

この度、刊行された拙著『幕末洋学教育史研究』は、以上のような歴史理解の精神と態度をもって、幕末期土佐藩の「徳弘家資料」を中心史料として、幕末期日本における洋学の普及拡大過程の実態解明を目的とした研究成果をまとめたものである。ところで、高知市民図書館が所蔵する「徳弘家資料」とは、幕末期土佐藩の西洋砲術師範を勤めた徳弘孝蔵とその子息が遺した、西洋砲術や西洋兵学などの西洋軍事科学を中心とする膨大な分量の幕末洋学関係資料である。この「徳弘家資料」を解読分析することによって、医学や薬学、本草学や暦学などの学問分野を中心に進められてきた、従来の洋学史研究や洋学教育史研究を含めた日本の歴史学研究において、最も看過あるいは軽視され、いわば盲点とされてきた、幕末期日本における西洋軍事科学を媒介とした洋学の中央・地方への普及拡大過程の実態解明が可能になるといえるであろう。

(1) 筆者の洋学史研究上の仮説

幕末期の武士階層を中心とする多くの青少年たちの洋学学習は、迫りくる欧米先進諸国の脅威を眼前にみて、如何にして自国の独立自尊を達成するかという国防的意識を直接的な契機として、国防に直結する軍事科学の領域から西洋世界に入ってきた。やがて彼らは、西洋軍事科学の成果やそれを生み出した学問文化が、如何に精緻で高度なものであるかに目覚めていく。それ故に彼らは、単に当初の学習目的であった西洋軍事科学の知識技術の修得をもって足りとはせず、さらに軍事科学に象徴される西洋諸国の文明開化を支えている様々な学問分野に進出し、より専門分化した洋学の学習を深めていく、という学習遍歴の軌跡を辿っていった。

かくして幕末期に洋学の学習を通じて西洋新知識を獲得した人々は、すでに

幕末期においてはもちろん、明治維新以降の近代日本の中央や地方に拡散して、適材適所の地位と役割とを得て、様々な分野で日本近代化―西洋化の推進を担い、先駆的あるいは開拓的な活動を展開していった。

(2) 従来の研究状況と問題点

上述のような幕末期の洋学の受容と展開に関する仮説の下に、これまでの洋学研究の進捗状況と問題点を探ってみると、次のごとく論述することができるであろう。幕末期の軍事科学系を含めた洋学の普及現象については、従来は医学や薬学、天文学や暦法学をはじめとする広範な洋学史研究の諸分野において、少なからず注目されてきた。しかしながら、そこにおいては、軍事科学系の洋学研究は傍系的な位置に止めおかれてきた。このような洋学研究の状況に対して、幕末維新期における蘭学の地域展開に関する実証的研究を進めてきた田崎哲郎氏は、次のように問題提起している。

医学を中心とする民生的な蘭学の拡がりの流れに加えるに、幕末期に軍事科学的な面も増加をみ、両々相俟って発展したとみるものである。在村蘭学の量的発展は、その中から軍事科学にかかわるものを生み出してくる場合もあり、軍事技術の直接的訓練を受ける者には庶民出身者も少なくない。民衆的観点に立てば、その福祉の向上こそが第一であり、これは単なる技術史的視点からは出てこない判断である。また明治期とのつながりを考えるとき、生活の一貫性とそれに関わる在村的蘭方医の連続性をみるのが、軍事技術については断絶が目立つようである。幕末洋学をみると、在村蘭学を十分に視野に入れつつ、軍事科学も捉える必要があるのではな

かろうか。

(田崎哲郎『在村の蘭学』、名著出版、一九八五年)

(3) 田崎見解に対する筆者の疑問

幕末期の軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大現象は、国家の軍事的レヴェルばかりではなく、様々な学問分野における先駆的な人材を準備し、さらには地域社会における殖産興業の振興という生活レヴェルにおいても、明治以降の日本近代化過程に連続する現象であったとみななければならない。今、これを論証するに、拙著『幕末洋学教育史研究』において析出した洋学学習者たちが維新後の郷里で展開した活動の事例を、次に紹介しておきたい。

【事例①】

岡山藩出身の下曾根門人であった香川真一(一八三五—一九二〇)は、帰藩後、同藩に鉄砲製法を導入して兵制改革を指導した。が、一八六九(明治二)年には、藩の権大参事となって維新時の藩政改革を担い、同四年には同藩同門の津田弘道と共に明治政府派遣の世界周遊視察団(岩倉欧米使節団)の一員に選拔され、欧米各国を巡遊して欧米見聞の体験を積み、洋学知識を拡大して西洋理解を確かなものとした。彼は、帰国後は、維新政府の高官に抜擢されて工部省に出仕したが、大分県令を経て退官し、その後は郷里である岡山県の県会議長となって政治経済面で尽力し、特に地域住民の生活上に貢献した。

【事例②】

同じく岡山藩の津田弘道(一八三四—一八八七)も、香川と同様、一八七一(明治四)年には、岩倉欧米使節団の一員として欧米先進諸国を視察するという貴重な経験を経験を積んだ。帰国後は、彼もまた、維新政府の官僚に採用され、鉦山権助や大審院判事等々を歴任する。退官後は地元の岡山で汽船会社や銀行などの民間事

業を振興し、香川と共に郷土岡山の近代化に貢献した。

【事例③】

加賀藩の佐野鼎(一八二九—一八七七)も下曾根門人であったが、帰藩後は藩の西洋砲術師範方頭取役や壮猶館教授を歴任し、同藩子弟に西洋砲術・西洋兵学などの西洋軍事科学を教授し、藩の軍制改革にも尽力した。維新後は、一八七〇(明治三)年に維新政府の兵部省に任用された。が、翌年、これを辞職して官有地(旧福山藩邸の一部)を購入し、現在の開成学園の前身にあたる私立共立学校(東京神田相生橋)を創設し、文明開化の人材育成をめざして中等教育界で活躍した。

【事例④】

越前鯖江藩の喜多山永隆(一八〇九—一八七三)も下曾根門人であったが、帰藩後は藩の武具奉行や藩校進徳館の教授などを歴任した。維新後は、大教院より教導職を拝命するが、晩年は家塾を開設して地域住民の子弟の教育に尽力した。

以上の数例は、いずれも下曾根門人であり、幕末期に国防的契機から西洋軍事科学系の洋学学習に入った人物である。維新後の日本近代化過程では、主として郷里を主な舞台として民生の向上に尽力した。彼らの他にも、今回の拙著『幕末洋学教育史研究』において解明した中央の下曾根門人や地方の土佐藩における徳弘門人には、維新後、様々な分野で日本近代化の一翼を担って地方の近代化に貢献した人物は多い。

さらにまた、筆者は、この三〇年近くの間、「日本近代化と信州・象山門人の軌跡」という研究課題の下に、これまで埋もれていた信州・長野県下の佐久間象山門人三百数十名を発掘してきた。彼ら信州の象山門人たちは、幕末期に活躍した勝海舟や吉田松陰、あるいは維新後の学术界で活躍した加藤弘之や西村茂樹などの著名な門人たちに隠れて、全く見落とされていた。だが、彼らも前述の著名な門人たちと同様、象山門人として「東洋道德・西洋芸術」思想の下に、西洋軍事科学を中心とする洋学を学んでいたのである。そのような彼ら

が、幕末維新期、特に明治以降の日本近代化過程において、信州という地域を舞台に、如何なる活動を展開したのかを、信州の町村史レヴェルまでの地域史料を採訪して調査してきた。いずれ一書にまとめて出版する予定であるが、結論的にいえることは、彼らの多くが、郷里に私塾を開設して塾教育を展開したり小学校の教師に奉職するなどして、信州教育の基礎形成に尽力したということである。教育界の他にも、洋学学習で獲得した西洋新知識を活かして、地域住民の生活向上に貢献する殖産興業を担い、様々な新規事業の開拓者となって活躍したのである。

(4) 幕末洋学史研究に関する筆者の見解

徳弘孝蔵とほぼ同時期に、江戸の西洋砲術界で活躍した佐久間象山は、幕府昌平校学頭であった佐藤一斎門下の儒学者として、江戸神田に漢学塾を開設して一家をなした。が、その後、齡三〇を過ぎてから、アヘン戦争を契機に高島流西洋砲術師範の江川門人となって西洋砲術を修得した。さらに彼は、オランダ語学を独習して、原書を読解できる洋学者として名声を馳せた人物である。その彼が、江戸に開いた西洋砲術塾には、全国各地から入門者が殺到した。彼らは、アヘン戦争直後から黒船来航前後に、外圧に対する危機意識から武士本来の国防意識に目覚めて入門する、というのが一般的な入門動機であった。吉田松陰や勝海舟はいうに及ばず、維新後、明治の司法界に重きをなす津田真道、初代の東京大学総理となった加藤弘之なども、国防という軍事的動機から洋学に接近した人々であった。攘夷の感情に突き動かされた青年期の彼等にとっては、象山塾に入門する目的は、実に単純明快で、西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）を習得することにあつた。そうした入門者に対して象山は、単なる西洋の軍事科学に関する知識・技術の次元を超えて、それを生み出し支えている西洋科学をこそ学ぶべきことを説き、彼が提唱する「東洋道德・西洋芸術」思想の理解と実践を基本とした洋儒兼学の私塾教育を展開した。そのよう

な入門者の例証として、次に佐倉藩の西村茂樹（一八二八—一九〇二）が入門する際に佐久間象山が説論した史料と、越後高田藩の前島密（一八三五—一九一九）がペリー来航に遭遇して、医学志望から西洋軍事科学に進路を変更し、下曾根塾に入門する際の史料の二件を紹介しておく。

□事例①「西村茂樹の場合」

佐久間の門に入り砲術を学ぶに及ぶに象山余に謂て曰く、砲術は未なり、洋学は本なり、吾子の如きは宜しく洋学に従事すべし、余の如きは三十二歳の時始めて蘭書を学べり、吾子は余の学べる時に比すれば年猶若し、必ず志を起こして洋学を勉むべしと、余謂へらく、余今西洋砲術を学ぶといへども其意は攘夷護国に在り、已に其術を得れば足れり、敢て彼の書を読むことを要せず、道德政事に至りては東洋の教は西洋の上にあるべしと、故に初めは象山の言を以て然とせざりし

（日本弘道会刊『泊翁西村茂樹傳』）

□事例②「前島密の場合」

時二嘉永六年、米国使船ノ来李シヨリ、国情大ニ騷然トシ、天下ノ志士モ皆、臂ヲ振ヒ胆ヲ嘗メテゾ立タリケリ。余モ亦、当時謂ヒラク、年末夕弱冠ニ至ラス、材末タ百夫ニ長タルニ足スト雖トモ、此ノ遭ヒ難キノ時ニ遭遇ス。豈ニ徒ラニ生涯ヲ医ノ小技ヲ以テ終ユベケンヤ。須ク志ヲ勃興シ、微力ヲ国ノ大事ニ尽スヘシト。

（山口修『前島密』）

以上のように、迫りくる外圧によって、ナシヨナリズムが急速に昂揚する幕末期の時代状況下で、当時の青少年たちは、当初は西洋軍事科学の成果としての単なる西洋砲術・西洋兵学に関する知識や技術の修得を目的に、軍事科学系の洋学私塾に入門した。だが、彼らは、入門後、そこからさらに西洋軍事科学を生み出している高度で精緻な学問—西洋近代科学の存在を知り、日本近代化

の基礎となる様々な領域の学問の修得に進んでいった。従って、幕末期の洋学は西洋軍事科学からインプットし、そこから西洋近代科学へとアウトプットし

ていった経路に特徴があり、そこにこそ国民レヴェルでの急速な洋学普及という教育的現象が生じた秘密があったとみてよい。

(五) 幕末期の軍事科学系洋学の実態解明と「徳弘家資料」

幕末期日本における西洋軍事科学の普及拡大という現象の端緒を開いた人物は、高島秋帆（一七九八—一八六六）であった。そして、その高島が、幕命を受けて西洋砲術の秘伝を伝授した最初の門人が、幕臣の下曾根信敦（一八〇五—一八七四）と江川坦庵（一八〇一—一八五九）であった。幕末期の西洋砲術・西洋兵学という軍事科学を内実とする洋学の普及拡大現象は、高島門下の下曾根と江川の両塾を中心とした教育的活動によって、広範な社会的認知をえて、その後の全国的な普及拡大への確かな方向づけがなされたとみてよい。

従来の洋学史研究を含めた歴史研究では、高島と江川に関しては多くの研究成果が示されてきた。だが、下曾根に関しては、学術的レヴェルでの研究と呼べる成果は皆無であった。さらに高島や江川、そして下曾根などの先駆的指導者たちの私塾に全国各地から集って西洋砲術を学んだ数多の門人たちが、帰藩後に地方レヴェルで展開した教育的活動の実態に関しては、ほとんど未解明の状態におかれた。

以上のような研究状況において、下曾根門人である土佐藩の徳弘孝蔵父子が遺した「徳弘家資料」は、次の三点において洋学研究史上における第一級の基本史料であると評することができる。

① 「徳弘家資料」は、高島秋帆から最初に西洋砲術を伝授された下曾根信敦の実践した私塾教育の実態を、下曾根の初期の優秀な門人となった徳弘孝蔵とその子息が、側近にいて直接に記録した西洋砲術関係史料を多数含む貴重な史料群である。また、徳弘父子が下曾根塾で修得した学習内容が、土佐藩で展開した徳弘父子の教育内容であったと考えられるが故に、

徳弘父子の西洋砲術・西洋兵学を中心とした洋学教育の実態を詳細に示す「徳弘家資料」は、これまで全く不明であった下曾根塾の教授内容や教授方法、さらには同塾への入門者の実際を物語る基本史料であるとしてよい。

従って「徳弘家資料」は、幕末期日本の中央における先駆的な軍事科学系洋学私塾における洋学教育の実態解明と、そこに学んだ門人たちを媒介として軍事科学を中心とする洋学が地方に普及拡大していく過程、即ち洋学の縦断的な普及拡大現象の解明に有効な基本史料である。

② 何といても「徳弘家資料」は、江戸の下曾根塾で西洋砲術・西洋兵学を修得した徳弘父子が、帰藩後に土佐藩内で展開した西洋砲術教育の実態を示す史料が中心である。それ故に西洋砲術・西洋兵学という西洋軍事科学を媒介として、土佐藩内への洋学の普及拡大過程を具体的に指し示す基本史料である。

従って「徳弘家資料」は、土佐藩を事例として、西洋軍事科学を媒介とした洋学の地域的な展開過程を解明する上での貴重な基本史料となるものである。

③ さらに「徳弘家資料」は、幕末期における同種他塾との関係性の解明、例えば同じ高島秋帆から西洋砲術を伝授され私塾教育を実践した江川坦庵の場合との比較、あるいは江川と下曾根の両塾で西洋砲術を学び、そこから本格的な洋学研究に進んだ佐久間象山の場合との比較、さらには西洋医学系の洋学塾との比較などが可能となる史料である。

以上によって、「徳弘家資料」は、江川や佐久間の私塾と共に、幕末期の軍事科学系洋学私塾の実態とその特徴の解明、さらには江川塾や佐久間塾に入門した土佐藩門人と土佐藩における徳弘門人との重複や相互関係性なども具体的に解明できる貴重な史料である。さらに「徳弘家資料」によって析出した軍事科学系洋学の学習者の学習遍歴を分析してみると、幕末期の軍事科学系洋学私塾が、単なる軍事科学に関する洋学教育の枠内に止まらず、緒方洪庵「適塾」や伊東玄朴「象先堂」などの医学系洋学私塾、あるいは福沢諭吉「慶応義

(六) 拙著『幕末洋学教育史研究』における研究成果の概要

(1) 第一章 幕末期の軍事科学を媒介とした洋学普及現象の歴史的意義 —「徳弘家資料」の洋学史研究上における史料的价值

本章では、従来の先行研究における異文化受容についての理解の在り方の問題、具体的には幕末期日本における洋学受容に関する理解の在り方の問題と、その洋学の普及拡大現象の歴史的意義についての把握の仕方の問題——とを検証した。すなわち、これまでの幕末期洋学の理解に関する先行研究を支えている歴史認識や研究視座を検討した結果、そこにおいて最も軽視あるいは看過されていた洋学の領域は、西洋砲術・西洋兵学を内実とする軍事科学系の洋学であった。このような従来の洋学史研究の状況に鑑みて、筆者は、西洋軍事科学を媒介とした洋学に着目することの重要性と、その幕末期日本の中央・地方への普及拡大現象の実態分析をすることの必要性とを痛感した次第である。

前述のごとく、幕末期日本の軍事科学系洋学は、強大な軍事力を誇る欧米先進諸国の到来を直接的な契機として、その量的変化と質的変容の両面において画期的な転換を遂げるに至った。実は、この質量面での転換によってこそ、幕末期日本の洋学は、それまでの医学系を中心とした特定分野の洋学者たちが独占する、難解な専門的学問（知識技術）であることから解放され、近世社会の

塾」などの英学系洋学私塾、等々の同時代の幅広い洋学系私塾における学習者との重複関係や相互移動などの相関性、すなわち学習者自身の主体的な私塾選択による学習世界の拡大という教育現象も確認することができる。

従って「徳弘家資料」は、幕末期における軍事科学系洋学私塾はもちろん、その他の医学系や英学系の洋学私塾とも密接な相互関係を有していたという教育的事実、即ち洋学の横断的な普及拡大現象の解明にとっても貴重な基本史料であるといつてよいであろう。

基本構造であった封建的身分制度の枠組を超えて、国防という緊要な課題の下に、否応なく国民全体の学習対象とならざるをえない、というドラスチック(dramatic)な転換を遂げることが可能となった。

以上のような洋学研究の在り方に関する論点を踏まえて、筆者は、幕末期の西洋砲術・西洋兵学を中心とする西洋軍事科学の受容と展開の諸相を、あくまでも歴史の実態に即した具体的史料の分析を通して解明することは、洋学の普及拡大に関わる教育史研究や洋学史研究はいうに及ばず、日本近代化研究を含めた歴史学研究上において、実に重要な意味を有する研究課題であることを、本章において論証した。

(2) 第二章 高島流砲術師範・下曾根信敦の門人析出

—西洋砲術の普及過程における下曾根ルートの解明

本章では、幕末期の軍事科学系洋学の普及拡大現象を、先ずは幕府の膝元である江戸という政治権力や学問文化の中心地において解明すべく、「徳弘家資料」に含まれる幕臣・下曾根信敦に関する史料の分析を通して、彼の西洋砲術教授の実態解明と可能な限りの門人析出を試みた。前述のごとく、下曾根は直

参旗本であり、幕命で西洋砲術の開祖である高島秋帆から、江川と共に西洋砲術の秘伝を直伝された幕府公認の西洋砲術師範であった。その彼の下には、全国諸藩から多くの入門者が殺到した。まさに下曾根は、幕末期日本の西洋砲術界をリードした先駆的な重要人物の一人であった。

だが、従来の歴史研究においては、高島と江川に関しては詳細な研究成果が数多く蓄積されてきたが、下曾根の西洋砲術の教授活動や彼の門人たちの解明は、全くなされてこなかった。このような研究状況を憂いた筆者は、「徳弘家資料」に含まれる下曾根関係の第一級史料を丹念に解読し分析した。その結果、筆者が特定できた下曾根門人は、総計三五九名であった。内訳は大名二九家、旗本・御家人とその家臣などの幕臣関係者が九九名、そして全国五八藩からの入門者一八二名。下曾根信敦という一人の人物が主宰する西洋軍事科学系の洋学私塾で、このように多数の入門者を特定しえたことは、本研究の大きな成果の一つであった。これによって、従来の「高島ルート」と「江川ルート」の他に、それら両ルートを凌駕するに足る第三の「下曾根ルート」の存在とその実態が明らかとなった。全国各地から参集した三五〇名を超える多数の門人を輩出した「下曾根ルート」の存在を立証しえたことは、西洋砲術・西洋兵学という西洋軍事科学を媒介とした幕末期の洋学が、身分や地域という近世封建社会の枠組を超えて、全国各地に面的な広がりをもって普及拡大し、幕末期の特異な教育現象となったという事実を如実に物語っている。

(3) 第三章 幕末期土佐藩への西洋砲術の普及過程

—「徳弘家資料」の分析による徳弘門人の析出

本章では、政治や学問の中心地である江戸という中央に普及した軍事科学系の洋学が、その後、如何にして全国各地に普及拡大していったかを明らかにすべく、土佐藩から江戸の下曾根塾に入門して西洋砲術・西洋兵学を修得した徳弘孝蔵とその子息の場合を取り上げ、この徳弘父子が遺した膨大な分量の「徳

弘家資料」の解読と分析を通して、南国土佐という遠隔の地に、西洋砲術・西洋兵学という最新の軍事科学系の洋学が普及拡大していった実態を解明した。具体的には、江戸の下曾根塾における徳弘父子の西洋砲術の修得過程と修得内容の解明、帰国後における西洋砲術の教授活動の実態分析と徳弘門人の析出、等々を原史料の分析を通して試みた。

その結果、本研究で析出できた徳弘門人の実数は、五六三名を数える。このことの学術研究上に持つ意味としては、次の諸点をあげることができるであろう。

① 緒方洪庵その他の西洋医学系私塾や佐久間象山その他の西洋軍事科学系私塾に学び、全国各地に拡散した洋学系門人たちの活動や軌跡は別の問題として、幕末期日本の政治経済的あるいは学問文化的な中心地・江戸から遠く離れた、四国の一隅の南国土佐に、これほどまとまりのある数の西洋砲術の修得者が存在した事実が解明されたことは、従来の洋学研究史や洋学教育史を含めた歴史学研究の世界においては、他に類例をみない研究成果であり、その事実の指示する歴史的意義は大きいであろうこと。

② 幕末期における西洋砲術の教授活動は、江川・下曾根・佐久間などの私塾の場合にみられるごとく、その教授・学習の教育内容が軍事的領域に属する知識技術であるが故に、職業軍人たる武士階層の人々、特にその下層にある者たちを主たる対象に展開されてきたと理解されてきた。だが、そのような従来の一般的な認識に反して、本研究が明らかにした土佐藩で、西洋砲術を学んだ徳弘門人たちの身分階層的分布は、藩主や筆頭家老から農漁民階層の一般領民に至るまでの、近世社会における身分階層の全範囲に及ぶものであったこと。このような事実は、軍事科学を内実とする洋学教育が、身分階層を越えて国民的な広がりをもった学習対象にまで拡大普及していたことを物語っている。と同時に、そのような洋学学習の士庶同学化という教育史現象が、身分制を骨格とする近世社会の基盤を内部から

崩壊させる契機となるような、学習成果に準じて地位や役割が賦与される能力主義や実力主義という、近代的な階層移動の原理が醸成され準備されていたことを示している、とみてよい。

③ 進取究明を率先垂範する幕末期の開明的な藩主の下で、家老職などの上位に位置する重臣たちの過半数が、下曾根門人あるいは徳弘門人となつて、実際に西洋砲術を修行していた。このような土佐藩の事例は、幕末期の三〇〇近くを数える全国諸藩の中でも、数少ない事例といえる。このような幕末期土佐藩における身分階層を超えた広範な領民たちの西洋軍事科学の学習は、前述のごとく、結果的に、身分制度その他の近世的な価値や權威の解体を促す、所謂、明治以降の近代化に連動する歴史的現象として、全国に拡大化していく先駆的事例として注目に値するものであること。

④ 安政元年（一八五四）に民兵制度を採用し、挙国一致の海防体制を整え、農漁民や獵師などの一般領民を藩兵制に組み込んだ幕末期土佐藩の民兵制度は、長州藩において吉田松陰の草莽崛起論を具体化して門人の高杉晋作が編成した土庶一体の「奇兵隊」に先駆けた先駆的事例であつたこと。このような幕末期における民兵制度の広がりは、やがて明治維新による近代国家の成立と共に、国家は国民全体で防衛するのが基本という、国民皆兵を旨とする徴兵制度の誕生に連結していく潮流となつていったこと。

⑤ 土佐藩における西洋砲術の普及拡大現象は、遠くアメリカ大陸に連なる太平洋に面した南国土佐の人々をして、結果的には幕末動乱期の偏狭な夷狄観や攘夷観から脱却させ、積極的に海外異文化の受容を促進して日本の西洋文明化を推進する基盤の形成と、そのために必要な開かれた国家的人材の育成とをもたらし、そこに徳弘父子の西洋砲術教育活動と、軍事科学を媒介とした土佐藩への洋学の普及拡大の歴史的意義が認められること。

以上のような研究成果によって、土佐藩という幕末期の一地方において、五六〇名を超える西洋砲術・西洋兵学の修学者、すなわち徳弘門人を特定することができたこと、しかも、彼等の身分詳細や学習開始年齢、学習期間や取得免許などの学習属性をも解明しえたことは、これまでの洋学研究を中心とする歴史学界の先行研究には全くみられなかつた成果であつたといえるであろう。

（4） 第四章 徳弘父子の西洋砲術を中心とした洋学知識

—「徳弘家資料」所収「書籍写本等史料」の分析

本章では、幕末期日本の西洋砲術家の洋学知識が、一体、どの程度の内容とレベルにあつたのかという問題を検討するために、「徳弘家資料」の中に遺された徳弘父子の「書籍写本等史料」の内容と特徴とを丹念に解読し分析した。これまでの洋学関連の歴史研究の成果としては、例えば最も早くに洋学—蘭学の研究を組織化した「蘭学資料研究会」とそれが発展して今日に至っている「日蘭学会」の蓄積した研究論文は膨大な数である（『蘭学資料研究』附巻の緒方富雄監修『解説・総目次・総索引編』を参照）。そこには、洋学者—蘭学者の個人的な蔵書写本類の調査結果が、多数、報告されている。だが、そこに掲載された蔵書写本の調査結果は、ほとんどの場合、蔵書写本の「目録」であり、その「目録」に記録されている肝心の蔵書写本の内容分析を試みた研究報告は、皆無に等しい状態であつた。

上記のような研究状況の下で、筆者は、徳弘父子が所蔵した約一〇〇点に及ぶ「書籍写本等史料」の解読を試み、各史料の内容と特徴の具体的な解明に努めた。その結果、徳弘父子の獲得した西洋軍事科学を中心とする洋学知識を、量と質の両面から明らかにすることが可能となつた。さらに、徳弘父子が所蔵した書籍写本等が、彼らの西洋砲術教授のテキストとして活用された可能性も大きく、それ故に徳弘父子の西洋砲術教育の内容と水準を推察することも可能となつた。

以上のような本章における「書籍写本等史料」の分析の結果、徳弘父子の西洋砲術を中心とする洋学知識は、同時代の他の著名な西洋砲術家たちの場合と比較しても決して遜色がなく、幕末期の西洋砲術界にあっては質量共に第一級のレベルにあったことを立証することができた。従って、徳弘父子が土佐藩を舞台に展開した西洋砲術教育は、下曾根や江川の私塾をはじめとする中央の西洋砲術塾での教育内容や教育水準と比べても大差なく、当時としては最新の西洋砲術教育を、南国土佐という四国の一地方において実践した、とみてよいであろう。

徳弘父子が遺した蔵書は、幕末期の洋学者、西洋砲術家の世界においては、高島や下曾根、あるいは江川や佐久間、大村益次郎などの蔵書写本に比肩するか、あるいは凌駕するものであった。徳弘父子の蔵書写本には、天保期から弘化嘉永の時代を経て安政年間に至るまでの時期に翻訳刊行された、代表的な西洋砲術や西洋兵学に関する書籍がほとんど含まれている。従って徳弘父子は、幕末期の西洋砲術家としては質量共に第一級の洋学知識を獲得していた知識人であったとみることができるといえる。南国土佐国に生まれ育って、時代の求める最新の西洋砲術世界に生きようとした徳弘父子は、内憂外患に揺れる幕末期日本の混沌とした時代状況の中で、西洋近代科学の基礎たる化学や数学、あるいは物理学や測量学を重視する西洋砲術の道を一途に志した。まさに彼らは、極めて合理的で緻密な軍事科学の学習を通して、西洋日新の知識技術を獲得し、それを多くの土佐藩の門人たちに教授伝達するという、地道ではあるが、実意義深い教育的活動を展開して生きたと評してもよいであろう。

(5) 第五章 幕末期におけるオランダ語号令の受容と日本語化問題

—「徳弘家資料」所収のオランダ語号令関係史料を中心とした分析

現代日本の学校や職場その他では、集団的な統一行動を指示するための号令が用いられている。はたして、このような号令法は、いつ、如何なる歴史的経緯を経て、日本社会に導入され定着したのであるか。本書の最後を飾る第五章では、以上のような問題意識の下に、号令法の日本における起原を、幕末期にオランダ人からオランダ語で教授された高島秋帆の、高島流砲術の銃陣号令にまで遡って究明しようとした。すなわち、日本における西洋砲術の開祖たる高島秋帆が、長崎出島に滞在したオランダ軍人から、最初に教授されたオランダ語を、そのまま片仮名表記した号令用語の内容や、その後、それが幕命で日本語に翻訳されなければ使用不許可となった歴史的な経緯、さらには日本語訳されたオランダ語の号令用語の翻訳表記の問題、等々を、「徳弘家資料」の中のオランダ語号令用語に関する原語スベルを含む諸史料と、他の関係諸史料との比較分析を通して解明しようとした。本来は、外来語の翻訳語であることを全く感じさせないほどに、自然な表現として日本社会に定着してしまった故にか、これまで、号令法ないしは号令用語の成立展開に関する歴史的な先行研究は、皆無に等しい状態にあった。

【参考事例：「徳弘家資料」の中の蘭語関係史料C055「西洋砲術開書」の一部】

ホーフド レフツ	<i>Hofvd regt (foofvd rechts)</i>	頭右へ
スタート	<i>Staat (staat)</i>	立目
リュスト	<i>Rust (rust)</i>	休メ
ゲーフトアクト	<i>Geef acht (geef acht)</i>	気ヲ付へ
ペロトン	<i>Peloton (peloton)</i>	隊列
ペロトン レフツヨフ		隊列右脇から
リンクス オイト デ フランク	<i>Peloton regt of Links, uit de flank</i>	
	<i>(peloton rechts of links uit de flank)</i>	
レフツ ヲフ リンクスオム	<i>Regh of Links om (rechts of links om)</i>	右向へ
ペロトン	<i>Peloton (peloton)</i>	隊列

レフツ オム ケールト		右向廻レ
	<i>Rechts om keert (rechts om keert)</i>	
フオール ワールシ	<i>Vore waarts (voorwaarts)</i>	前へ
マルス	<i>Marsch (mars)</i>	進メ
ベロトン	<i>Peloton (peloton)</i>	隊列
ハルト	<i>Halt (halt)</i>	止レ
スコインス レフシ	<i>Schins regts (schuins rechts)</i>	スシカへ斜右へ
マルス	<i>Marsch (mars)</i>	進メ
スコインス レフシ	<i>Schins regts (schuins rechts)</i>	斜右へ
マルス	<i>Marsch (mars)</i>	進メ

おわりに

以上が、本書を構成する五つの章で取り上げた研究課題と研究結果の概要である。幕末期日本における急激で広範な洋学普及の現象を、その修得者・学習者の普及拡大という教育的側面から捉えれば、数量的には軍事科学系が医薬学系その他の領域を圧倒的に凌駕していたことは、否定しえない事実である。この点を、本研究は「徳弘家資料」という新出資料の解読と分析を通して、いまだ不十分なながらも、解明することができた。

幕末期の対外的な危機意識の高揚する緊迫した時代状況の下で、急速にナショナリズムが昂揚し、国防意識に目覚めた日本人が、軍事科学系の洋学に接近していった。確かに彼らは、幸か不幸か、軍事的契機で幕末期に洋学と邂逅したが、それは異質な文化との出会いであり入り口であった。その後の彼らは、西洋軍事科学の修得過程を通じて、その基盤となっている西洋近代科学の卓越性を、いかに認識していったのか。そして彼らが、それまでの自己の偏狭な西洋観や洋学観の革新を図り、軍事科学に直接する知識技術レヴェルの次元を超えて、どのような専門分野の学問領域に進出し、日本近代化過程に関わっ

フオール ワールシ	<i>Vore waarts (voorwaarts)</i>	前へ
マルス	<i>Marsch (mars)</i>	進メ

(※蘭語スペルは徳弘数之助の筆写、括弧内のスペルは筆者が補正したもの)

以上のような本章における「徳弘家資料」を中心史料とした分析によって、初めオランダ軍人からオランダ語で日本人に教授・伝達されたオランダ語の号令語と号令法が、幕末期の西洋軍事科学を媒介として翻訳・紹介され、日本社会の中に普及拡大する歴史的経緯を実証的に解明することができたことは幸いであった。

ていったのか。

以上のような問題意識から、幕末維新期の西洋砲術・西洋兵学に代表される軍事科学を入り口として西洋の学問文化に接近した、幕末期の洋学学習者たちの学歴や職歴の遍歴過程を辿りながら、彼等の描いた社会的人生の軌跡を比較分析していくことは、筆者の「東洋道徳・西洋芸術」思想の研究の具体的な研究課題である「幕末維新时期における洋学学習者の社会的階層移動に関する実証的研究」の一環である。その意味で、本書は、そのための基礎的研究と位置づけることができる。

最後に、本研究を通してみえた幕末期の土佐藩について一言、付言しておきたい。「徳弘家資料」を遺した徳弘父子は、土佐藩の西洋砲術師範として、藩内に西洋軍事科学の教育を通じて洋学の普及拡大を図った功労者である。その徳弘父子の軍事科学を中心とする洋学知識は、幕末期の日本にあっては最新のものであった。確かに江戸や大阪、あるいは長崎などからみれば、土佐藩は遠隔の地であった。だが、徳弘父子と出会った土佐藩門人たちは、当時としては

第一級の西洋軍事科学者から、最先端の軍事科学を媒介とした洋学教育を受けることができたとみてよいであろう。一体、如何にして土佐藩は、混迷する幕末維新期の日本の進路選択に深く関与することができたのか、そして多くの国家有為の人材を数多く供給することができたのか。そこにおいて、徳弘父子による軍事科学を中心とする洋学教育の影響があったことは看過しえない。即ち、幕末期の土佐藩は、他藩に先駆けて西洋軍事科学を導入し、それを媒介として洋学の普及拡大を図ることができた。そして、その成果によって、偏狭な鎖国攘夷の呪縛から解放され、「世界の中の日本」という解放された広い視野から日本の将来を透視する視座を獲得し、坂本龍馬や武市半平太など、多数の人材群を、幕末維新期の日本に貢進することができたといっても決して過言ではないであろう。

※付記

本稿は、平成十六年六月二十六日（土）に、拙著『幕末洋学教育史研究』の刊行を記念して、高知県立歴史民俗館で開催された筆者の出版記念講演の内容に、若干の加筆補正を加えてまとめたものである。出版記念事業（出版祝賀会と出版記念講演会）を企画し実施された、発起人の高知大学名誉教授の上森千秋先生と山崎堯右先生、それに筑波大学名誉教授で元高知県立大学学長の成田十次郎先生をはじめとする、関係各位の皆様には衷心より感謝申し上げます次第である。

なお、拙著『幕末洋学教育史研究』に対して、高知県から、地方の時代における地方からの学術文化の発信の具体的成果として御高評を給わり、平成十七年度の「高知県出版文化賞」（高知県文教協会）を、また高知市からは「高知出版学術賞」（高知市文化振興事業団）を贈られた。研究者として非常な名誉であり、望外の喜びである。この栄誉は、前述の高知大学名誉教授の上森千秋先生や山崎堯右先生、筑波大学名誉教授で元高知女子大学長の成田十次郎先生をはじめ、地元、高知県の先生方の御指導、御鞭撻を頂いた

ことの賜物である。さらに、高知市議会や高知市教育委員会、特に高知市民図書館の四代に亘る歴代館長をはじめとする職員の皆様の、長年に亘る多大な御協力、御支援によるものである。関係各位に、心より御礼の言葉を申し述べたい。